The Egoist における女性像

鈴　木　幸　子

〔序〕

George Meredith は1855年の *The Shaving of Shagpat* に始まり1895年の *The Amazing Marriage* に至るまで15編の長編小説を書いている。それはほとんどヴィクトリア朝後半期の全域にわたり、ディケンズ、サッカレーなど数多くの偉大な小説家たちと時期を同じくするものであった。このような小説隆盛時において、メレディスの道徳的および審美的な意図の意識的な真面目さは、ジョージ・エリオットと共に[1]新しい文学の成長のひとつとして注目すべきものである。

メレディスの小説に対する評価は、今世紀に入って衰微の一途をたどってきた。もともと彼の小説は、警句につぐ警句、その文体は人の意表をつく荒唐さで、かっては読者を遠ざけていたが、[2]作者の晩年には一時爆発的人気を博したこともあった。しかし文体に関してはともかくとして、メレディスの哲学に、その安易さ、浅薄さのゆえに、現在では利用する価値がない。さらに、感傷主義に対する彼の攻撃的論議は現代の人々を退屈させるものである。また作者が小説の中で語る冗長な説教は、聞きぐるしいものであり、その内容にとぼしい、などといわれるに至った。[3]うのうえ、メレディスの喜劇論[4]を読んだ読者は作者が社会生活という背景について当然把握しているはずのもの――それはジョンソンやコングレーヴの喜劇などにみられる性質のものであるが――を期待して彼の小説を読むが、その期待は見事に裏切られて失望させられるのみである、ともいわれている。[5]しかし、作品に対するこれらの不評にもかかわらずメレディスの小説が我々の心をひきつけ、我々の心に訴えてくるものは、物語を通じて我々に伝えようとする作品の厳正な道徳観であり、また、その観念に貫かれた彼のフェミニズムの思想であろう。ここに、自他共に完成された小説とみなされている[6] *The Egoist* をとりあげてみようと思う。『エゴイスト』は若い一英国紳士、Sir Willoughby Pattern が主人公となっている小説である。彼は 'Sir Willoughby Pattern is negatively a study of feminism.'[7] ともいうべき人物である。次に、ここに登場する二人の女性、Clara Middleton と Lætitia Dale に視点をあててみよう。すなわち、彼女たちの性格と行動によって、プロットがどのように運ばれてゆくか、また各々道徳観という支えによって人生に乗り出してゆく女性たちの醸し出す雰囲気および彼女たちのそれぞれの運命によって暗示される作者の人生観などについて考えてみたいと思う。これらのことは、『エゴイスト』を論ずるには、やや部分的すぎるきらいはあるが、この作品の特質のひとつを把握するためには考察にあたいすべき問題ではないかと思わ

れる。

〔I〕

さて、ここで『エゴイスト』の持つテーマについて概観してみよう。メレディスは『エゴイスト』の出版2年前に、喜劇論を発表した。この論によれば「真の喜劇は思慮深い笑いを誘うもので、それによって人間社会が文明化されるものである」[8]という意味のことが述べられている。そして1879年の秋、『エゴイスト』が発表された。この小説は副題に *A Comedy in Narrative* と記されていて、さらに Prelude では喜劇論で彼が論じている趣旨の喜劇の効用について強調されている。それによると、「喜劇は人間の営む社会生活に関してひとびとに反省を与えるために演ずるものである。したがって人間の ego をテーマとしてとりあげ、かかるテーマからひとびとを笑いにさそい、その笑いを通してエゴに反省を与えてみよう。」つまり、この物語の Prelude のなかで、「富と地位とをかね備えた一人の英国紳士がエゴのために社会の中で、どのように閉じ込められて身動きができなくなってしまったかを、思慮深い笑い[9]によって照らし出してみよう」という意図が述べられている。しかし、その裏には、エゴイストである男性と相対した場合、女性はこれにいかに反応し、又その体験を通していかに自己を識るに至るか、そういった過程を観察することもまたこの小説におけるもうひとつの重要なテーマではないかと考えられる。

つぎにこの作品のプロットについて考えてみよう。メレディスは1887年アメリカの一通信員につぎのように語っている。

'I do not make a plot,' …… 'If my characters, as I have them at heart, before I begin, were boxed in a plot, they would soon lose the outlines of their features.'[10]

これによると、メレディスは『エゴイスト』のプロットを、作者の意志や好みに従って操作しないで、[11]作中人物の性格発展の成行きに委せたものと思われる。それでは主人公と考えられている、[12]サー・ウイロビイ・パターンによる物語の展開はありうるだろうか。ウイロビイは、この小説の中で、終始一貫してエゴイストなる人物である。そこで、E. M. Forster の定義によれば、ウイロビィは 'flat'[13] な人物とみうけられる。したがってウイロビィの人生に対する態度および行動には、物語の始めから終りまで、変化や発展がみられない。そのため彼からはどのようなプロットの展開をも期待することはできない。そこで考えられるのは、クレアラとレティシアがこの小説において果す役割である。

〔II〕

クレアラは聡明で美しい女性である。彼女は、自分でうかつに取り決めてしまったウイロビィとの婚約が間違っていたことを悟り、これを解消しようと努力する。この小説における彼女を中心とした物語の部分は、56章600頁あまりの全文の中で大部分を占めている。クレアラ

は、すでに第4章で、'It's not too late, Willoughby.'[14] と語り、さらに 'Think; question yourself whether I am really the person you should marry.'[15] といって二人の婚約について、ウイロビィに反省を求めようとする。しかし、それに反してウイロビィは、尚一層クレアラを独占したい気持がつよまる。そこでクレアラの心はウイロビィと語りあえばあうほど彼から離れていった。[16] さらに Crossjoy 少年の教育についての問題[17]や、Flitch の事件[18]などで、彼女は、ウイロビィが何事も自己中心的にもの事を考える人物であることを悟らされる。彼女はこの婚約をどのように解消しようかと思い悩み、公正な心の持主である学者、Vernon[19]の助言をうける。そしてついに自己のとるべき態度を決める。

この小説は、48章までほとんどクレアラの解放が中心となって物語[20]が発展している。このため読者はクレアラの心の中にひきこまれる。クレアラはウイロビィの一方的な押しつけがましい愛情から逃れることができないので彼女の父親に頼るが、その父親すらウイロビィと同盟を結びそうな気配である。このようなクレアラの立場は大いに読者の同情と興味をひき小説の最後まで読者の心を強くひっぱって行く。このことから考えると、クレアラの自己認識という精神的成長と、さらに自己に忠実になろうとする行動によって『エゴイスト』のプロットは展開されている、とみなすことができるのではなかろうか。

レティシアは、クレアラと全く対照的なかたちで登場してくる女性である。彼女はこの小説の冒頭に次のように作者によって紹介されている。

His girl (Lætitia) *was portionless* and a poetess …… She was pretty; her eyelashes were long and dark, her eyes dark blue, and *her soul was ready to shoot like a rocket out of them at a look from Willoughby.*[21]

これに対してクレアラは、

She (Clara) *had money* and health and beauty, the triune of perfect starriness, which makes all men astronomers. *He* (Willoughby) *looked on her, expecting her to look at him. But as soon as he looked he found that he must be in motion to win a look in return.*[22]

と描かれている。これらの文章から作者の皮肉や批評眼が三人の作中人物——クレアラ、レティシア、ウイロビィ——に向けられていることが、うかがえるが、二人の女性たちのウイロビィに対する態度も、あますところなく、しかも対照的に伝えられている。まづクレアラが 'had money' に対し、レティシアは 'was portion less' である。ウイロビィに対するクレアラの冷やかな態度に反してレティシアの彼に対する態度には一途な気持があふれている。しかし、クレアラの精神的成長と並行してレティシアも現実に目覚め、ウイロビィに対する愛情も除々に冷えていく。ただしこの経過は、非常にひかえめに示されているので読者の注意をクレアラのように強くひくものではない。そのうえ、クレアラの場合と大いに異ったものがレティシアの立場にはみうけられる。すなわち、クレアラには解放されて広い人生に泳ぎ出るという生活

に対する積極性や希望がある。これに反してレティシアは容姿が 'The modest violet'[23] から 'old race'[24] そして、'the hue of winter'[25] へと移り行くのと並行して彼女の精神も消極的になり、人生に対する諦めを持ち始める。そして、ついにウイロビィが彼女に求婚したときの彼女の言葉は次のようである。

'I am tired,' she said. 'It is late, I would rather not hear more. I am sorry if I have caused you pain. ……I can only say, I am a woman as good as death: happy to be made happy in my way, but so little alive that I cannot realize any other way. As for love, I am thankful to have broken a spell. You have a younger woman in your mind; I am an old one: I have no ambition and no warmth. My utmost prayer is to float on the stream —— a purely physical desire of life: I have no strength to swim. Such a woman is not the wife for you, Sir Willoughby. Good night.'[26]

レティシアのこの心の変化は、虚栄心のつよいウイロビィにとっては致命的な打撃となり、このシーンは喜劇のクライマックスを作り出している。これらのことを考察してくると、作者はクレアラにこの物語の展開を委ね、さらにレティシアによって『エゴイスト』という喜劇を完成しているとみなすことができよう。これらのことから、彼女たちがこの作品に占めている位置というものが非常に大きなものであると考えられるのではないであろうか。

〔Ⅲ〕

さて、Virginia Woolf によればメレディスの小説には哲学が未消化のままとり入れられていて、小説としてはあまり満足すべきものではないといわれている。しかし、メレディスの時代は、*'Pride and Prejudice'*[27] や *'The Small House at Allington'*[28] などによって英国小説の形式が、いち応、一様化され統一されたあとであった。したがって、これらの一様化された小説の形式から脱却するために、メレディスは哲学や詩の要素をその中に取り入れたのである。それゆえ、彼がその小説において哲学を強調していることも止むをえないであろう。以上のようにウルフは、メレディスの小説に対し、かなり同情的な意見をいだいているが、[29] 一方、彼女は次のようなメレディス批判もこころみている。

Above all, his teaching is too insistent. He cannot, even to hear the profoundest secret. suppress his own opinion. And there is nothing that characters in fiction resent more. If, they seem to argue, we have been called into existence merely to express Mr. Meredith's view upon the universe, we would rather not exist at all. Thereupon they die; and a novel that is full of dead characters, even though it is also full of profound wisdom and exalted teaching, is not achieving its aim as a novel.[30]

しかし、はたして、これをこの小説の二人の女性たちにあてはめることができるであろうか。

メレディスは、クレアラをもって、人間は反省し、自己および自己の周囲の現実を識ることによって、運命を開拓し前進することができるものである、という人生観を表現している。しかし、このことによってクレアラはウルフが述べているように、やはり生気に乏しい人物となってしまっているであろうか。ウイロビィについては、作品の性質上、余りにも徹底してエゴの面のみ描かれ、彼の性格の発展のないことと相まって'wax model'[31]または'dead character'[32]とも考えられる。これに反してクレアラは、 She gives you an idea of the Mountain Echo'[33]または'the nymph of the woods'[34]と表現されているような清々しい生気にあふれた女性である。彼女は25章 The Flight in Wild Weather にみられるような、柔軟な意志と妖精のような行動をする。この小説の作中人物、Mrs. Mountstuart によれば、'dainty Rogue in porcelain'[35]といわれる Rogue の面をもっている女性でもある。クレアラはクロスジェイ少年との約束を忘れ、彼を数時間も雨の日に戸外で待たせてしまったり、朗かで dandy な Colonel De Craye とまたたく間に親しくなったりする。

They (Clara and Colonel De Craye) chatted like a couple unexpectedly discovering in one another a common dialect among strangers. …… Lætitia watched Miss Middleton in surprise at her lightness of mind. Clara bathed in mirth.[36]

これらのことは、クレアラガ婚約を解消しようとして不安な日々を送っている時期でもあったのでクレアラの心の軽い一面は、彼女という作中人物に現実性を持たせる要素ともなっている。

一方、レティシアについては、この小説の各所で、彼女の感傷的な性格が作者の批判的な目で眺められているが、彼女がおかれている不遇な立場や、その心の動きについての巧みな描写を通して、我々はレティシアなるひとりの可憐な女性の姿に心をひきつけられる。それは、この作品の中で、クレアラの明るさと対照的に暗さを醸し出しているかもしれない。さて、ウイロビィはレティシアに、はやくから好意を示して彼女に結婚の期待をいだかせてきた。しかしそれにもかかわらず、彼は突然外国旅行に出かけてしまう。しかも旅行中、故郷の家族にあてたウイロビィの手紙には、レティシアにたいしてなにも語られていない。

……She (Lætitia) assisted at the reading of Willoughby's letter to his family, and fed on dry husks of him wherein her name was not mentioned.[37]

それでもなお彼女は、ひとりでひっそりと耐えしのんだ生活をつづける。数年後ウイロビィは帰国する。彼が家路にさしかかると、偶然にも野原で子供たちと草花をつんでいたレティシアに迎えられる。その場面の絵のように美しいシーンと、相変らず忠実なレティシアの眼差しとはウイロビィをすっかり満足させる。彼は喜びと愛情の言葉を彼女にあびせて、彼女の心をさわがせる。

…… Plucking primrose was hard labour now —— a dusty business. She could

have wished that her planet had not descended to earth, his presence agitated her so; …… She could almost have reviled the woman who had given this beneficent magician, this pathetic exile, of the aristocratic sunburnt visage and deeply-scrutinizing eyes, cause for grief. How deeply his eyes could read! The starveling of patience awoke to the idea of a feast. The sense of hunger came with it, and hope came, and patience fled. She would have rejected hope to keep patience nigh her.[38)]

このようなレティシアも、たび重なる結婚に対する失望を味わった絶果、ウイロビィに対して批判的になり、感情的な女性から知的な女性へと変化していく。しかし、同時にまた彼女は人生を積極的に生きる望みを失ってしまう。しかも、レティシアがヴァーノンに想いを寄せていたのではないかと想像させる次の数行は、彼女の不幸をより一層強めている。

They (Clara and Vernon) promised to visit her (Lætitia) very early in the morning, neither of them conceiving that they left her to a night of storm and tears.

She sat meditating on Clara's present apprecition of Sir Willoughby's generosity.[39)]

レティシアは、クレアラが小説に登場する前にこの物語に大きく浮びあがってくる。そして、クレアラを中心に、この物語が展開してゆく間は、レティシアは、やや控えめな脇役を守っているが、物語の終末になって、ウイロビィの求婚を彼女が拒絶することにより、読者の興味を一手にひきうける中心人物となる。これがごく自然に運ばれてゆくのは、一つには作者のプロットの組立てが非常に巧みである[40)]ことが理由として考えられるが、また一つには、レティシアが作中人物として、いかに Vivid な存在であるかを示しているように思われる。

〔Ⅳ〕

クレアラとレティシアに共通してみられる特徴は、彼女たちが人生にたいして真面目でありとくに誠実な態度をもって臨んでいることである。クレアラは、愛情もないのに婚約をしている自分の立場を深く反省して、

In her case duty was shame: hence, it could not be broadly duty.[41)]

と考える。またレティシアに

'He requires a different wife from anything I can be. That is my discovery; unhappily a late one. The blame is all mine.'[42)]

と謙虚さをもって語る。そこで、このようなクレアラの言葉の中にレティシアは自分にたいする嫉妬心を感じとり次のように自分の立場および、その心を明らかにする。

' …… Ten years back —— eleven, if I must be precise, I thought of conquering the world with a pen. The result is that I am glad of a fireside, and not sure of always having one; and that is my achievement. My days are monotonous, but if I have a dread, it is that there will be alteration in them. My father has very little

money. We subsist on what private income he has, and his pension: he was an army doctor. I may by-and-by have to live in a town for pupils. I could be grateful to any one who would save me from that. …… Last year's sheddings from the tree do not form an attractive garland. Their merit is, that they have not the ambition. I am like them. Now, Miss Middleton, I cannot make myself more bare to you. I hope you see my sincerity.'[43]

以上の言葉にはレティシアの誠実さがあふれ、自分を評価する彼女の態度には厳しいものが感じられる。ここにはレティシアの崇高さが描き出されている。しかも、レティシアはクレアラがなんとかしてウイロビィとの婚約の破棄を思いとどまるようにと願う。しかし、事態をはっきり悟ってからは、クレアラに手をかして、事の成行きに決着をつけようとする。

さて、メレディスは、利己主義者のウイロビィに笑いを投げかけて、読者および作中人物（ここではクレアラとレティシアを指す）に反省を与え、自己を識るようになることを意図している。このことは、明らかに作者が小説を書くのに道徳的なものを目ざしていることを示している。しかも、喜劇論および、序論で作者が語っている言葉から総合して考えると、作者のこの道徳的態度にはかなり意識的なものがあるといえよう。そのうえ、前述のようなクレアラとレティシアによってこの作品にもたらされている雰囲気に関していえば、我々はその道徳的色彩が大いに濃厚なものであるとしてうけとることができる。

〔V〕

喜劇論および『エゴイスト』の序論などに一貫してみられることは、メレディスはなによりも人間の知性を信頼している作家であるということである。まさに彼自身の言葉を借りれば、

'By intellectual courage,' he said, 'we make progress. Intellect is the guide of the spiritual man. Feeling and conduct are to be thought of as subordinate to it. Intellect should be our aim. It can be developed by training. The morbid and sentimental tendencies in the ordinary healthy individual can be corrected by it. Starting wrongly, a man can be brought right by it.'[44]

である。クレアラは、その知性によって、エゴイストのウイロビィと結婚することをまぬがれた。その結果、いつのまにか互に愛しあっていたヴァーノンと結婚できるようになった。ヴァーノンこそは、真に彼女の人格を尊重し、また、クレアラも彼を尊敬することができた。このようなクレアラの前途は明るいものに感じられる。それにたいし、レティシアは、知性によって自分を識り、また、ウイロビィなる人物を認識することができたが、それにもかかわらず、彼女の生活は必ずしも幸福なものになったとはいえない。レティシアがウイロビィとの結婚をついに受け入れたとき、彼の伯母たちに語った言葉は次のようなものであった。

'He (Willoughby) asks me for a hand that cannot carry a heart, because mine is

dead. …… I used to think the heart a woman's marriage portion for her husband. I see now that she may consent, and he accept her, without one. But it is right that you should know what I am when I consent. I was once a foolish romantic girl; now I am a sickly woman, all illusions vanished. Privation has made me what an abounding fortune usually makes of others —— I am an Egoist …… my girl's view of him has entirely changed; and I am almost indifferent to the change. I can endeavour to respect him, I cannot venerate.'[45]

レティシアのように 'heart' のない女性との結婚は、男性にとっても、また、女性自身にとってもある意味では大いに不幸なことであるようにもおもわれる。さらにレティシアは、

' …… I have a hard detective eye. I see many faults.'[46]

と語っているが、このように相手の欠点のみ、見出だす眼というものが、果して生活を向上させるものであろうか。作者が、

But he had the lady with brains! He had: and he was to learn the nature of that possession in the woman who is our wife.[47]

と述べているように、ウイロビィとレティシアのの今後の生活がどのようなものであるかはこれからの問題となるであろう。また、このような二人の結婚を成立させたことは、むしろ読者には作者のウイロビィにたいする皮肉として受けとることもできる。そして、かかる結婚はかえって読者に滑稽感をいだかせる。しかし、作者がこの物語の結末で、ウイロビィをそのエゴイズムのゆえに罰したところで、レティシアが精神的には救われるものでもないであろう。

このように知性に目覚めた二人の女性の運命を考察すると、「知的なものによって人間は進歩しうるものである。」というメレディスの思想が、批評家たちが指摘している[48]ような必らずしも楽天的なものでないということが、レティシアの運命を通して考えられるのではなかろうか。

〔結　　語〕

メレディスは喜劇において喜劇の本質を考えさらに序論にてこれを再確認し、きわめて周倒なる用意のもとに喜劇『エゴイスト』を書いた。それは、彼とその最初の妻 Mary Peacock との結婚生活の苦い失敗を経て、第二の妻、Marie Vulliamy と情熱的に結ばれ、やがて彼女と平凡な日常生活を送るようになってから、書かれたものである。[49] 彼は3カ月間ほどの激しい集中的な努力のもとにこの小説を書きあげた。その大部分は夜を徹して書かれた。そのために彼は健康を害したほどであった。[50] これらのことは人生経験豊かな作者が、いかにこの作品に心血をそそいでいたかを物語るものである。そして、ここに描きえたものは、エゴイストなるがゆえに罰せられた一人の男性と、彼をめぐって数々の運命にみまわれた二人の女性であった。彼女たちのうち一人は、まっ正直に自己をみつめ、勇敢に自分の道を切りひらいていった

若くて美しい知的な女性であり、他の一人は愛を捧げようとしても相手にはこれを受入られず、若いライバルが現われても嫉妬に狂うというような見苦しい様子もみせず[51]、しかも寄る年波で容姿は衰えながらも人生に対して毅然たる態度を保っている女性であった。

作者はウイロビィを作品の中心人物として登場させ、これをあらゆる角度から眺めて、女性に対する男性のエゴイズムを分析し、かつこれを照しだしてくれた。しかも、それと同時に、彼はウイロビィのエゴイズムを通して人生に目覚めてゆく二人の女性の姿を描きだした。我々は彼女たちにたいしても、ウイロビィにたいするのと同じような客観的で冷静な、また批判的な作者の目を感ずることができる。しかし、ここでさらに注目すべきことは、作者メレディスがこれら二人の女性を通して彼が常に心に抱きつづけてきた理想的タイプの女性像を描きだそうと試みたことである。このメレディスのいわゆる理想的女性像というのは、とくにクレアラを通して描き出されているように、独立心をもち、しかも生命力豊かで、清廉潔白な知性のある女性である。作者はこのような女性と共に生活することが人類の進歩につながるもの[52]と考えているようである。しかし、それに伴う一つの危険、すなわち、レティシアにみられるような 'heart'[53] を見失うということからくる人生の悲劇も作者は描かずにはいられなかった。

しかしながら女性はその知性によって進歩し、一切の社会的束縛から解放されるというメレディスの考えにたいしては、つぎのような反論がなされている。Miss Adeline Sergent によれば、彼女は

…… Under no circumstances will women ever be the mates of men in the sense which Meredith attaches to the words. A woman's physical constitution alone disables her from becoming what is usully called 'the equal' of man. …… George Meredith forgets that where are root-differences of physical constitution there are also sure to be root-differences of mind and temper. …… no amount of intellectual training will obliterate these distinctions of sex.[54]

と述べている。すなわち、メレディスは、その『エゴイスト』において次のように考えている。これまで多くの女性は、男性のようにゆたかな思想と行動の自由を与えられていない。このため女性はその能力を充分に発揮する機会がないので男性により劣った人間とみなされる。したがってその知性によって女性は、道徳観、判断力および自己の行動を男性同等の水準にまでたかめ、男性の 'the mate'[55] となり、また 'the mother of a nobler race'[56] ともなるよう努力しなければならない。この場合男性と女性とは質に於いて異るので、同等とか、または劣っているという言葉をこの場合に用いることはふさわしくない。そこで男性と女性の間には同一の道徳律、および判断力が存在しうるとは、とうてい考えられぬことである。従って、いかに女性がその知性により進歩しても、両性の差をなくすることは不可能であろう。このように Miss Adeline Sergent は反論している。しかし、メレディスの意図は男性と女性の相違を無視することにあったわけではないと思う。むしろ作者は両者の相違をそのまま相違として認

め、そのうえで女性は女性としての特色をより理想に近い形で生かすために女性特有の「知性」を持ちだしてきたのであろう。クレアラの知性は大胆に自分の意志を表現するその行動やものの考え方にしめされ、かつそれは女性独特の魅力となってあらわれている。また、一方、レティシアが人生にたいして彼女が抱いていた期待を裏切られ、失意と幻滅にみまわれながらも、毅然として生きる希望を失わず、つつましやかに、しかも確かな足取りで人生を歩むという態度を持ちつづけていくことにも、女性の生きる理想的な姿として読者の心に深い感銘をあたえるものである。メレディスは『エゴイスト』を書くにあたって、女性を分析し、解釈しようとするばかりでなく、彼女たちに「より広大な人生」[57]を与えようとした。しかし、レティシャに関していえばそのような作者の期待にもかかわらず、彼女の歩んだ道にもみられるように「より広大な人生」は容易に彼女に得られるものではなかった。

メレディスの『エゴイスト』はミルの『婦人の隷属』（1869年）より10年後に出版されたものである。メレディスがこの作品の中でフェミニズムを唱導したことは、ある意味において時宜に適したことであるともいえる。[58] しかし彼のフェミニズムは、職業面、経済面において女性を社会的制圧から解放することよりもむしろ男性対女性という関係において女性の地位をより高く、かつ確かなものにしようとすることが眼目とされているようにおもわれる。メレディスは女性が女であるとともに、一人の人間として、より高い人格の完成をめざしてゆくその努力の過程を描こうとした。同時に彼は、彼女らに与えられた現実を精密に分析することもおろそかにはしなかった。このような作者の態度に、われわれは彼のフェミニズムの特質をうかがい知ることができる。要するに作者は、この小説において、彼が本来心にいだきつづけてきた人類向上の理想主義――それはある意味でかなり楽天的理想主義でもあるのだが――を追求しているが、その反面、女性をリアルな存在としてあるがままの姿でとらえようとした。そこに、この小説において終始一貫したメレディスのリアリズムの態度がみられるのである。以上述べてきたことにより、メレディスは、単なる 'a moralist'[59] でなく、モラリストの面をそなえた理想主義的リアリストであることが明らかにされたであろう。そして、彼の作品『エゴイスト』を真に魅力あるものにしているのは、作中人物――特にここでは主人公を取りまく二人の女性――をあつかうに際しての作者のかかる理想主義的リアリズムの態度からくるものではないかと考えられる。

【註】

＊ 名古屋大学英文学会（1967年8月26日）の発表草稿に筆を加えたものである。

① W. Allen, *The English Novel* p. 218

② R. L. Gallienne, G. *Meredith, Some Characteristics* p. 2

③ E. M. Forster, *Aspects of the Novel* pp. 85, 86

④ G. Meredith, *An Essay on Comedy*（1877年）

⑤ W. Allen, *The English Novel* p. 236

V. Woolf, *Common Reader*, 2nd Series p. 233

Van Ghent, *The English Novel* p. 410

⑥ R. Stang, *The Theory of the Novel in England* 1850—1870 p. 40

⑦ J. A. Hammerton, *G. Meredith* p. 232

⑧ G. Meredith, *An Essay on Comedy* p. 88

⑨ Ibid.

⑩ Quoted in R. Stang, *The Theory of the Novel in England* 1850—1870 p. 40

⑪ R. L. Gallienne, *G. Meredith, Some Characteristics* p. 29

⑫ G. Meredith, *The Egoist* (Constable London, 1915) p. 6

⑬ E. M. Forster, *Aspects of the Novel* p. 65

⑭ G. Meredith, *The Egoist* p. 52

以下 *The Egoist* 本文からの引用は頁数のみ示す。

⑮ p. 59

⑯ p. 59

⑰ p. 124

⑱ p. 127

⑲ メレディスの理想的タイプの男性で、彼の一部分はメレディス自身がモデルとなっており、かつまたメレディスの親友、Leslie Stephen がモデルになっているともいわれている。

M. S. Henderson, *G. Meredith* p. 170

J. A. Hammerton, *G. Meredith* p. 107

⑳ W. Allen, *The English Novel* p. 242

㉑ p. 17

㉒ p. 42

㉓ p. 20

㉔ p. 90

㉕ p. 101

㉖ p. 492

㉗ Jane Austen の小説、1813年出版

㉘ Anthony Trollop の小説、1864年出版

㉙ V. Woolf, *Common Reader*, 2nd Series p. 234

㉚ Ibid. p. 234

㉛ Ibid. p. 233

㉜ Ibid. p. 234

㉝ p. 37

㉞ p. 232

㉟ p. 48

㊱ p. 207

㊲ p. 27

㊳ pp. 31, 32

㊴ p. 611

㊵ E. M. Forster, *Aspects of the Novel* p. 88 : 'an example of a concealed emotion from the admirable plot of *The Egoist* : it occurs in the character of Lætitia Dale.'

㊶ p. 239

㊷ p. 185

㊸ p. 188

㊹ Quoted in J. A. Hammerton, *G. Meredith* p. 306

㊺ p. 618

㊻ p. 618

㊼ p. 621

㊽ V. Woolf, *Common Reader*, 2nd Series p. 233
W. Allen, *The English Novel* p. 236
Van Ghent, *The English Novel* p. 185

㊾ Sencourt Robert Esmonde, *The Life of G. Meredith* p. 209

㊿ S. Sasoon, *G. Meredith* p. 143

(51) J. A. Hammerton, *G. Meredith* p. 249

(52) Ibid. p. 232

(53) p. 618

(54) J. A. Hammerton, *G. Meredith* p. 237

(55) Ibid.p. 236

(56) Ibid. p. 236

(57) Ibid. p. 231 : 'Richardson most faithfully interpreted the contemporary feminine character; Meredith has sought to breath into woman a larger life.'

(58) 英国においてフエミニズムに思想的裏付けを行なったのは、ジョン・スチュアート・ミルであろう。彼がその『婦人の隷属』（1867）の中で述べている主張に従って、19世紀後半のイギリス社会では、職業面、社会面における婦人たちの解放がめざされるようになった。また、この時期にオックスフォードやケンブリッジには、女子大学が設立された。さらに既婚婦人財産法が成立し、それによって、妻が自己の財産を所有している場合には、夫の妻に対する経済的拘束から妻を解放し、かくして男女の平等は理論的な立場からも主張されるようになった。さらにヴィクトリア朝のめざましい物質文明の発達は、家の中の閉ざされた生活から多くの女性達を解放した。したがって、ヴィクトリア朝後期において「男女は平等なり」という思想はイギリスのすべての階級に行きわたり、フェミニズムの実践はますますさかんに行なわれるようになった。G. M. トレヴェリアン英国社会史下（林健太郎訳）参照。

(59) M. S. Henderson, G. M. p. 2